1. 御城印の規格等

○ 販売額 ： ５００円/枚（税込）
左記の御城印と下記の説明書がセットです。

○ サイズ ： A6 サイズ 105mm×148mm （A4 サイズの 1/4）

○ 材質 ： 奉書紙

○ デザイン ： 大分市在住の画家・北村直登氏

○ 書 ： 大分高等学校書道コースの学生

○ イメージ ： かつて府内城は、大分川と住吉川に挟まれ、海辺に面し、白土の塀と、まるで水上に浮かぶその姿から「白雉（はくち）城」とも呼ばれたことから、そのイメージで作成しました。

2. 御城印の説明書

○概説

府内城の築城は、大友氏が国を去った後、府内領主の早川長敏に続いて府内に入った福原直高が豊臣秀吉から命を受け、慶長 2 年(1597)に着手されました。その後、城づくりは竹中重利に引き継がれ、徳川家康の許可を得て、本丸、二ノ丸と北ノ丸、三ノ丸が慶長 7 年(1602)に完成しました。

城郭としての特徴は、北方を海に、東方に大分川河口が面した、高低差が殆ど無い平坦な城にあり、大きく三つの郭と三重の堀からなっていました。かつては、四層の天守を持ち、23 の櫓と 5 つの門、3 箇所の廊下橋が築かれていましたが、戦災などにより失われてしまいました。

現存する「宗門櫓（しゅうもんやぐら）」と「人質櫓（ひとじちやぐら）」は、県指定文化財となっており、江戸時代の意匠を今に伝える貴重な文化財です。また、堀や塀、石垣も県指定となっており、それ以外の部分も市指定の史跡として保護され、大分市民の憩いの場となっています。2006 年(平成 18 年)には、日本百名城に選定されています。

大分川と住吉川に挟まれ、かつて海辺に面した府内城は、白土の塀と、まるで水上に浮かぶその姿から、「白雉（はくち）城」とも呼ばれていました。

○家紋

家紋は、徳川家一門である大給松平家の丸に釘抜の「釘抜紋」を使用しています。大給松平家は、1658 年(明暦 4 年)から 1871 年(明治 4 年)の廃藩置県までにわたり府内藩主をつとめました。

○書：大分高等学校書道コース

大分高等学校書道コースは、県内唯一の書を専門的に学べるコースとして、これまで数々の実績を残し活躍しています。

○デザイン：北村直登氏 (大分市在住)

北村氏は、大分市の路上から作家活動をスタートさせ、大ヒットドラマにも提供されたカラフルでポップな作品は、街なかのディスプレイやパッケージにも数多く採用されています。デザインは、白雉（はくち）城の由来となった幸運の鳥「白い雉(きじ)」をモチーフにしています。